



かどのくちしょう 門之口 奨さん (25)

有限会社有島製茶の経営者の一人。鹿屋市茶業青年の会「緑萌会」所属。鹿屋農業高校、鹿児島県立農業大学校を卒業。

同世代とこれからの農業を考えていく

私は最初から茶業をしようと思っていなかったが、農業を志す同世代と出会ったことが転機となりました。一緒に農業について語り合うなかで、興味を持ち一度やってみようと思ったのがきっかけです。父は私の選択にはあまり口を出しませんが、一緒に働くことを決めたときはとても嬉しかったです。

子どもの頃から父の仕事を見てきたつもりですが、実際に自分が仕事を始めて、改めて大変さや難

かのや茶の“ゴールドドロップ”は先人から紡がれる生産者の想い



あらたけ こうすけ 荒武 康介さん(右)は高校の同級生。門之口さんが声を掛け、共に働いている。

しさを感じています。また同時に父への尊敬の念も高まりました。有島製茶では全ほ場で有機JAS認証(※1)とアジアGAP認証(※2)を取得しているため、管理が大変ですが、一から作り上げた茶畑の絶景を見たときや、茶葉の匂い・味を感じたときにやりがいを感じます。この道を選んでよかったと思っています。

※1：化学物質に頼らないことを基本に、自然の力で生産された食品について国が定める国家規格
※2：食品安全・労働安全等の国際規格

鹿屋の農業を同世代で支えていきたい

今の一つの目標として、茶業に関わらず、鹿屋の農業を同世代で支えていきたいという思いがあります。そのため、同世代の農業従事者をもっと増やして、後継者がいない農地を引き継いでいきたいと思っています。そこで私にできることとして、SNSによる情報発信を始めました。

SNSを通して、まずは自分のコミュニティを広げる。そこで興味を持った人へ農業を紹介したり、自社農地を拡大していく中で共に働いたりできたらいいなと思っています。最近では、SNSを通じて東京など県外から問い合わせも増えてきています。「かのや茶は他の産地のお茶には絶対に負けない」という自信があります。今後もふるさとに誇りをもって茶業に励んでいきたいと思っています。



ありませいちや ▲有島製茶 Instagram

かのや茶の概況

鹿屋市の茶栽培においては、国内のリーフ茶(急須等で淹れるお茶)の国内消費量の減少に伴い、生産者数や栽培面積などが減少傾向にあります。また、茶生産者の平均年齢も

58.9歳(令和8年5月末現在)と高齢化が加速している状況です。このため、かのや茶を次世代につないでいくためには後継者や新規就農者の確保等が急務となっています。

	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年	令和8年
栽培面積(ha)	330	326	319	292	282
茶生産者数	44	42	39	35	31
茶工場数	27	25	24	22	22

日々の暮らしに かのや茶の彩りを

明治の世から百六十余年、笠野原の広大な台地や輝北の清らかな山間などで、幾世代もの先人たちが紡いできたかのや茶の歴史。そこには土を耕し続けてきた生産者たちのひたむきな情熱が息づき、現代に引き継がれています。お茶の美味しさと凝縮された旨味が詰まった最後の一滴『ゴールドドロップ』。かのや茶のこの一滴には先人が紡いできた歴史と今を生きる生産者の想いが凝縮されています。

家にはいつもポットの前に急須が置いてあり、好きな時にお茶を淹れる。そのような情景が当たり前の時代もありました。慌ただしい朝の始まりに、あるいは少し疲れて帰ってきた夕暮れに、一杯の「かのや茶」がそこにあるだけで、心と体がすっと潤い、流れる時間が色づき始めます。何でもない毎日の暮らしの中に、この心強い深緑のしずくを置いてみましょう。お茶を淹れるひとときがあなたの日々に溶け込み、欠かせない生活の一部となってくれるはずですよ。